



新たに国登録有形文化財となる あぶしょう 油正ホール

久居本町通りを南に向けて進むと、



右手に黒い板壁の大きな土蔵が現れる。これが、新たに国登録有形文化財となる「油正ホール」である。

この建物が建てられたのは、かつて油屋として店を構えていた江戸時代末期にさかのぼる。その屋号や建物が、明治2年に創業の現在の酒・みそ・しょうゆの醸造業者に引継がれ、近年まで米蔵兼精米所として用いられてきた。建物は、けた行き9間、はり行き5間の木造2階建の切妻造り棧瓦ぶきで、本町通りに面する東側は1・2階の各5カ所に小庇を持つ窓を設け、下見板張りの黒壁に窓のしっくいのが白が映え、表情豊かな外観となっている。

また、内部は間仕切り壁で区切られ、かつては北寄り6間分が旧米蔵、南寄り3間分が精米所として使われていた。当初の土間床は、平成16年に木造床へと改修されているが、柱傷や展示資料として残された精米機に、当時の酒造りの雰囲気を感じ

ることができる。

国の登録有形文化財の登録基準の一つである「国土の歴史的景観に寄与しているもの」に該当する文化財建物としてだけでなく、改修後は見学者の休憩や展示スペースとして、またコンサートや集会に積極的に活用されていることが高く評価された。

酒仕込み本番の季節を迎え、醸造蔵の看板建物として、かつての城下町の目抜き通りに建つ重厚な建物である。

(「広報津」平成20年2月1日号)



重厚な造りの酒蔵を活用した油正ホール